

旭川医大 病院ニュース

<https://www.asahikawa-med.ac.jp/>



編集 旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
谷野美智枝

働き方改革下の新時代を迎えて

病院長 東 信良

職員の皆さん、日々の勤務に加え、大きな変革の波の中でも病院機能を維持していただき、誠にありがとうございます！患者の皆さんにおかれましては、医師の働き方改革やそれに伴うデジタル化へのご理解に感謝申し上げます。

働き方改革については、数年におよぶ準備期間があり、その間に行われた日々の工夫や意識改革がある程度は奏功し、2022年度に40名であった年間の時間外・休日労働時間が960時間越え（兼業先の労働時間を除く）の医師数は、2023年度には27名へと大幅に減りました。一方、どうしても減らない診療科、即ち、短縮できない診療内容を構造的に有する診療科があることも浮き彫りになってきました。こうした診療科は、現状のような方法論では通用しない対象と考えられます。解決に向かう糸口は、時代が変わったことを受け入れ、悪しき平等の時代を卒業し、働く価値を考える時代の扉をあけるマインドセットの変更にあるのではないかと考えています。

医療価値とは、医療行為によって患者さんが受ける恩恵を、コスト（労働時間、人件費、有害事象、冒すリスクの大きさなどを含む）で除いたものと言われております。これまで、コストの部分（特に、労働時間）を見てこなかった時代に生きてきた我々ですが、いよいよ、それが見える化され、かつ、働く時間が制限されている今の時代、「大きなリスクを冒し、長時間かかる治療を行って、大きな恩恵を生む診療科に、引き続き価値を発揮していただくためにどうしたらよいか?」、皆さんによく考えていただくことが必要です。具体的に言えば、例えば、医原性のもを含む大出血や臓器虚血、あるいは腸管穿孔など、それを助けてきた診療科医が診療時間の関係で駆けつけてくれなくなったら、あるいは、常に患者（例えば新生児）に寄り添う部署に若手が入らず先細りになる、そんな時代が来たら困りますよね。

働き方改革は、制限された働ける時間を如何に有効に価値ある仕事に充てるかを考える時代を運んできたわけです。自分の人生の時間をどう使うかを価値だけでなく時間で考える時代になり、長く働かざるを得ない、あるいは、緊急呼び出しが多いなど働く時間が読めない診療科は就職先として避けられる傾向が強くなると予想されています。そうすると、これまでのような高品質の医療を広いスペクトラムで提供することが難しくなるでしょう。そのようなことが起こらないよう、まず、時代が大きく変化することを一刻も早く認識した上で、これまで長年慣らされてきた全て平等の認識を捨てる必要があろうかと思えます。

我々大学病院の職員は、診療は勿論、教育と研究を行うという大きなタスクがあります。それが悦びでもありますが、働き方改革時代にその3本柱を維持するためには、本気で①デジタル技術やAIの助け、②タスクシフト、タスクシェア、③地域内での機能分担などの対策を行ってゆくことが求められると思います。しかし、構造的に長時間労働が必要な診療科には、なかなか有効な手段は見いだせず、960時間以内を達成するには、直接、チーム構成員を増やすことしか手段がないように思います。例えば、構造的に働く時間が長い診療科に診療看護師(NP)を配属するというのは如何でしょう? 「NPは国家資格ではない」という批判があることは知っていますが、変革の時代に生き残るためには、そこに生きる我々の考え方を変えなければならないのです。むしろ、価値観が変化してゆく過程を歓迎し、例えば「NPを目指す方々には自分たちの能力を発揮できるチャンスを謳歌していただける」と考え方を変えることができます。新たな価値感を応援できる病院であって欲しいと願っています。

働き方改革は小手先のものではなく、真の果実が得られる改革でなければならないとも思っています。働く職員にも患者さんにとっても実のある改革を打ち、その成功体験を全体で謳歌してゆければと思っています。今後6年間の大学病院改革プランをホームページに公開いたしました。プランには、働く時間が制限されている中でも、診療レベルの維持とともに教育や研究を行う時間を確保するための方策が実現可能な範囲で記載されています。一致団結して、旭川医科大学病院が引き続き地域に愛され、そして病院の理念である、患者中心の医療を実践し、地域に貢献し、国際的にも活躍できる医療人を育てていけるよう、力を合わせてまいりましょう！

就任のご挨拶

内科学講座（内分泌・代謝・膠原病内科学分野） 教授 野本 博司

このたび、2024年4月1日付で当学に赴任させていただきました野本博司と申します。当講座の前身であります内科学第二講座（通称第二内科）は1974年に石井兼史教授が開講され、牧野勲教授、羽田勝計教授、太田嗣人教授と引き継がれ、私が第五代教授としての職を拝命いたしました。このように大変歴史のある講座をお任せいただくことは、身に余る光栄でございます。

私は北海道帯広市に生まれ幼少期を過ごし、函館ラ・サール高校へと進学いたしました。当学の同窓の先生方には十勝にゆかりのある方々や同校ご出身の諸先輩が数多く在籍しておられ、心強く感じております。高校卒業後は北海道大学医学部に進学し、糖尿病・内分泌疾患を専門とするため、母校である北大の旧第二内科に入局致しました。大学院では糖尿病膵β細胞の転写因子に関わる基礎研究を中心に従事し学位を取得し、米国UCLAへの研究留学を経て、これまで糖尿病膵β細胞の基礎研究と、数多くの臨床研究に携わってきました。目の前の患者さんに対する臨床上の疑問点から出発して、結果を日々の診療に還元できる臨床研究は、基礎研究とは違った楽しさ・奥深さがあります。これまでの当教室の基礎研究を発展させることはもちろんですが、臨床を基盤とする教室として、ぜひ「臨床研究といえば旭川医大の第二内科」と認知いただけるよう努めて参ります。

これまで当教室を支えて下さってきた強力なスタッフ陣のお知恵と、若い先生方のフレッシュな力をお借りしながら、当学の内分泌・代謝・膠原病学の発展のために尽力させていただきたく存じます。皆様には今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



新人医師、新人看護師 デビュー



ようやく立てたスタートライン

研修医 佐藤 有沙

研修医として入職してから今まで、あっという間の3か月間でした。最初は慣れないことも多かったですが、先生方、コメディカルの皆様、研修センターの方々に支えていただき、日々の研修に臨むことができます。机上の勉強だけでは見えなかった世界に毎日触れ、念願の医師になれたのだということをやや実感しています。実際の現場では、試験問題とは異なり、白か黒かの2択で判断できないことばかりで、

そのたびに学び続け、経験し続けなければならぬのだと痛感します。いつもご指導くださる皆様、そして研修をご了承くださっている患者様のおかげで学ばせていただいていることを忘れず、昨日より今日、今日より明日、より良い医師に近づけるよう、精進し続けます。



新人看護師としての2か月

9階西ナーステーション看護師 越智 穂香

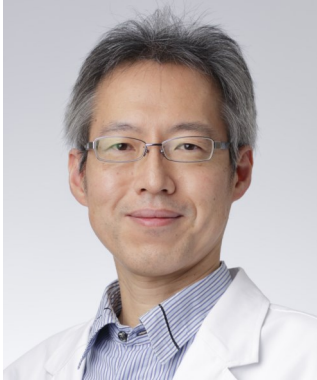
4月から、9階西ナーステーションに配属され2か月が経ちました。初めは慣れない早起きや弁当作り、新しい環境に対する緊張から、毎日出勤するだけで精一杯でした。コロナ禍で実習に制限があったため、患者さんとの何気ないやり取りが頑張る原動力でした。今は少しずつ出来ることが増え、部署に特徴的な心疾患や心電図の勉強に励んでいます。

また、9階西ナーステーションの方達は、新人へのサポート体制がとても手厚いです。毎日の指導のおかげで自身の成長を感じながら働くことができ、感謝しています。今後は、1日でも早く多くの看護技術を習得し、先輩方のように常に患者さんの立場に立ち行動できる看護師を目指して努力していきます。



臨床検査・輸血部長就任にあたって

臨床検査・輸血部長 准教授 坂本 央



令和6年4月より奥村利勝部長（現理事）の後任として、臨床検査・輸血部長を拝命しました坂本央と申します。令和5年度より大学の臨床検査医学講座が廃止となり、臨床検査・輸血部が講座の役割を引き継ぎ、臨床のみならず学生教育や研究についての役割も担う、言わば「シン・臨床検査・輸血部」へと生まれ変わりました。

採血、生理機能検査、血液・免疫・生化学等の検体検査、微生物検査、遺伝子検査、輸血・細胞療法等に携わり、検査件数は年間約450万件と全国的にも非常に多く、検査の正確性については国際規格「ISO15189」に認定されています。臨床検査医学は基本19領域に含まれており、当院は学会の認定研修施設として医学部学生等の教育にも注力しており、各科の諸先生のご指導を仰ぎ、学術研究を発展させています。

皆様に深く信頼される臨床検査・輸血部を目指して、スタッフ一同努力を続けていきますので、ご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

看護助手アルバイトを採用しています

看護部副看護部長 久保 千夏

看護部では2024年3月より、旭川市内の看護学生を看護助手アルバイトとして採用しています。長期休暇中、授業の前の早朝や授業が終わった夜間帯に看護師とともに補助業務を行っています。アルバイトの看護助手はピンクやブルーのエプロンを着用しています。

主な業務は、配膳、下膳、ベッド周囲やお部屋の整理・整頓、回診などに使用する医療材料の補充・点検などです。また、看護師と共に行う業務として、移動や体の向きを変えるお手伝いなどをさせていただきます。

患者さんたちからも「丁寧に対応してくれてありがとう」といった感謝の言葉をいただいております。

アルバイトの皆さんは「将来看護師として働くうえで大変勉強になり、楽しいです」と一生懸命働いています。



『さあ、看護の未来を、見つけにいこう。』 看護の日・看護週間

看護部総務委員会



フローレンス・ナイチンゲールの誕生日である5月12日は「看護の日」と制定され、この日を含む1週間は看護週間とされています。

看護部では看護の日にちなみ「看護の心」を伝えるためのイベントを開催しました。

毎年恒例の入院患者さん一人ひとりへのメッセージカードや、今年2回目となる看護の日写真展を開催し、看護師の真剣な仕事風景や患者さんとの関わりを切り取った写真で看護の心を伝えました。また、コロナが5類になった今年は市内から19名の高校生を招き5年ぶりのふれあい看護体験を実施することができました。

ふれあい看護体験では井戸川看護部長の挨拶、病棟看護師による印象に残った看護の体験や令和6年元日に起きた能登半島地震被災地でのDMATの活動についてお話ししました。高校生が真剣に聞いている姿、時間が不足するほど活発に質問する姿が印象的でした。その後、臨床シミュレーションセンターに場所を移し心臓マッサージや車いすでの移送・乗車を実際に体験してもらいました。高校生からは、看護で患者の気持ちに寄り添う大切さを知った、看護師が真剣に仕事に向き合っていると感じた、心臓マッサージでは看護師の冷静さと知識に驚いた、看護の道に進みたいという思いが強くなったので勉強へのモチベーションが上がったなどたくさんの感想をいただきました。



日本看護協会の今年のテーマは『さあ、看護の未来を、見つけにいこう。』でした。近い未来、今回ご縁のあった高校生と同僚になれる日を楽しみに待ちたいと思います。

食べること・飲みこむことの検査法嚥下造影検査について

リハビリテーション科 石田 健一

食べること・飲みこむことの障害を摂食嚥下障害と言います。摂食嚥下障害は脳卒中を代表とする脳血管疾患以外にも、悪性腫瘍や外傷による脳・口腔・舌・咽頭の損傷や、認知症などでみられます。誤嚥性肺炎や窒息の危険性を高めるだけでなく、『食事』という生活の楽しみを失うことにもつながります。

リハビリテーション科では摂食嚥下障害を評価するために、嚥下造影検査を行っています。検査ではバリウムを混ぜた食物を使用し、X線造影によって口腔から食道まで飲みこみの様子を観察することで、残留や誤嚥の有無を確認します。診断を行うだけでなく、安全に食べる手段についても検討します。例えば、水分で誤嚥の危険性がある場合には、トロミをつける・飲みこむときの姿勢を調整するといった対策をとります。

患者さんから、検査で使用する食物についての質問をいただくことがあります。当科ではコンビーフやポテトサラダなど、味のしっかりした食品を使用し、なるべく美味しく検査ができるよう工夫をしています。また、X線を使用する検査のため、短時間で終了するよう心がけています。

安全に食べるだけでなく、楽しく食べることも尊重しながら摂食嚥下障害の診療を行っています。摂食嚥下障害が疑われる場合は、お気軽に当科までお問い合わせください。



▲実際の検査の様子。医師と看護師、言語聴覚士、放射線技師で検査を行います。

パルスオキシメータ特許申請50周年によせて

—世界中で数多くの人の命を救ったパルスオキシメータ開発における
お宝が当院にあることをご存じですか?—

麻酔科蘇生科

牧野 洋

呼吸器内科

佐々木 高明

今から50年前の1974年、日本光電工業の青柳卓雄氏がパルスオキシメータの特許を申請した。そのころ札幌の篠舞療養所に勤務していた中島進先生（現森山メモリアル病院名誉院長）はこの発明に興味を持ち、日本光電に試作品の製作を依頼、中島先生は完成したパルスオキシメータの試作品を用いて世界初の臨床応用に成功した。

青柳氏らがパルスオキシメータの開発を行っていたのと同時期に、ミノルタカメラ（現コニカミノルタ）の山西昭夫氏らのグループもパルスオキシメータの開発を進めていた。ミノルタは特許申請を行ったが、たった1か月の差で青柳氏らの後塵を拝すことになった。しかしミノルタは、その後もパルスオキシメータの開発を精力的に継続した。そのころまでのパルスオキシメータはセンサーで耳介を挟んで測定していたが、ミノルタは現在のように指先で測定することを考案し、世界初の指尖測定型パルスオキシメータMET-1471を開発した。

ミノルタは、そのころ旭川医大第一外科に異動されていた中島先生に、MET-1471の評価を依頼した。1977年に旭川医大病院の9階東病棟において、食道がん術後の呼吸不全患者に対し世界初の指尖測定型パルスオキシメータの臨床応用が行われた。

その後、ミノルタはMET-1471と中島先生の手書かれたMET-1471に関する論文を米国スタンフォード大学麻酔科に持ち込み臨床評価を依頼した。スタンフォードの小児麻酔科医たちはパルスオキシメータの有用性・将来性に強い魅力を感じ、そのうちの一人Dr. William Newはネルコア社を起業して、パルスオキシメータの世界的な普及機を作った。その後パルスオキシメータは世界中に普及し、数多くの人の命を救っている。MET-1471は世界中にパルスオキシメータが普及するきっかけを作った機械であるともいえる。

世界初の臨床試験に用いられた旭川医大のMET-1471は、呼吸器センター大崎能伸教授（現名誉教授）のもとで大切に保存され、現在も呼吸器内科に受け継がれている。牧野が全国的な調査を行ったところ、同機は開発社であるミノルタにも残されておらず、当院に現存する機体は世界でただ一機現存するものだと推定される。今後も当院の宝といえる同機が当院において大切に保存されていくことを願っている。



◀MET-1471：機体内のハロゲンランプで作られた光が黒い管の中を通る光ファイバー内を通過してクリーム色の測定部に運ばれる。測定部に挟まれた指先を透過した光は、黒い管の中を通るもう一本の光ファイバーで本体に戻される。SpO₂の算出を行うための演算は、マイクロコンピュータが一般的な時代ではなかったために、トランジスタとオペアンプを使用したアナログ演算回路によって行われていた。装置としての完成度は高かったが、ごく僅かな体動でも測定値が影響を受けるなど、実際の患者では使い勝手が悪く、残念ながら広く普及するには至らなかった。

働きやすく学びやすい環境を目指した二輪草センターの発展

病理部・病理診断科 部長・教授 谷野 美智枝

皆さん、こんにちは。

今年度よりセンター長に就任しました谷野美智枝です。

前任の山本明美先生のご退職に伴い、第4代センター長として着任しました。どうぞよろしくお願いいたします。

二輪草センターは、「旭川医科大学と大学病院をより働きやすく、学びやすい環境にすること」を使命として2007年に設立されました。その後、出産や育児、介護をしながら仕事をする職員にとって働きやすい環境を整備するため、復職、キャリア、子育て・介護、病児保育に関する部門が次々と設置されていきました。2011年からは学生を対象にワークライフバランスの授業が開始され早いうちから将来の仕事と家庭の両立を考える時間が設けられています。そのほかにも様々なワークショップやセミナーなどを主催し、働きやすい職場に関する情報提供、支援を行ってきました。そのような取り組みの成果は、設立から17年を迎える現在、「役職のある女性医師の増加」や「看護師の離職率の減少」、「育児休暇取得率の増加」などに数値として表れています。これまでのオリジナリティ溢れる先駆的で数々の取り組みやその成果は全国的にも注目されています。



全国的には女性医師の半数が20~30代、当大学の医学科では入学者の約半数が女性、看護学科では約90%が女性です。一方で、来年には日本は超高齢化社会を迎えどの職員にとっても介護が身近になるでしょう。妊娠や出産を考えていたり子育てをしていたりする若い職員たちからの意見、介護をしながら働く職員の意見を積極的に吸い上げ、二輪草センターをより一層発展させ、大学および大学病院で働く全職員が安心して働ける、あるいは、働きたいという意欲がかきたてられるような場所になるような環境作りに取り組んでまいります。

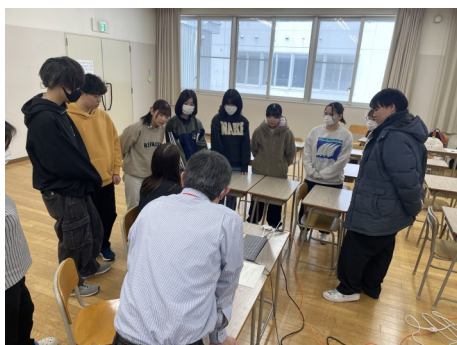
旭川がんのリハビリテーション研修会実行委員会主催

市民公開講座「がんと私～車いすバスケットと出会って～」を開催して

リハビリテーション部 主任理学療法士 塚田 鉄平

車いすバスケットボール選手で日本代表としてパリパラリンピックに選出（補欠）された碓井琴音（うすい ことね）選手をお招きして、市民公開講座を開催しました。今回は市内小中学校にもお声かけし、11校30学級が参加し現地・オンラインを合わせて延べ913名の市民が参加しました。

講演では、碓井選手が14歳の時に骨肉腫を発病し、治療として医師から下肢の温存の選択肢を提示されましたが、『義足をつければ走れる』ならと右下腿からの切断を選択し、闘病生活や義足を着けてからの生活のことや高校3年生の時に車いすバスケットボールに出会って日本代表を目指すまでの体験などを力強く語ってくれました。講演後、小中学生からの質問の一つ一つ丁寧に回答してもらいました。想像以上に質問は多く、小中学校の先生方からは『子供たちの反応に大変驚いた。今後もこのような機会を設けてもらいたい』とのお言葉をいただきました（当院リハビリテーション科のホームページに質問と回答を掲載しています）。



講演終了後のアンケート結果から、碓井選手が語った『自分が選択したことが正しくなるように頑張ろう』『障がいがあるといってもフラットに接してくれる友達の対応が嬉しかった』『障がい乗り越えるというより上手く付き合う』といった言葉に感銘を受けている声が多く聞かれました。

旭川医科大学スポーツ医科学研究委員会では、パラスポーツを推進しています。

私は北海道パラアスリート発掘事業の委員も兼ねています。パラスポーツにチャレンジしてみたい、興味があるという方は（リハビリテーション部直通電話0166-69-3550：塚田）までご連絡ください。

薬剤部 副作用情報 (81) 薬剤関連顎骨壊死 (MRONJ)

薬品情報室 久保 靖憲

薬剤関連顎骨壊死 (MRONJ) とは特定薬剤が原因となり顎骨の壊死や骨髄炎を呈する疾患である。症状として疼痛、動揺歯、口腔・顎・顔面領域の骨露出等が出現し、8週間以上骨露出が継続した場合にMRONJと診断される。リスク因子として抜歯などの歯科処置、口腔の不衛生等が挙げられる。

原因薬剤としてはデノスマブやビスホスホネート系の骨吸収抑制薬があり、これらの薬剤の添付文書にはMRONJが重要な基本的注意に記載されている。近年、異なる作用機序の薬剤でも発症が報告されているが、症例報告が中心であるため、原因薬剤との結論は出ていない。

治療法として、発症早期では口腔内洗浄と抗菌薬による保存療法が中心となる。壊死が進行している場合には、壊死した骨を除去する手術が行われる。いずれにせよ、MRONJは一度発症すると根治が困難になることが多く、予防が非常に重要である。

発症予防には、うがいや歯磨きといった口腔ケアが非常に有効である。また、薬剤開始前には事前に歯科を受診し、抜歯などの歯科処置を行い、口腔の不衛生を改善した上で開始することが強く推奨される。開始後も口腔衛生を保つ必要があることから、骨吸収抑制薬の開始時は、患者にまず口腔ケアの重要性を十分に教育することが求められる。

骨吸収抑制薬の使用中に抜歯を行う場合、従前は3か月程度の休薬が推奨されてきたが、2023年に日本口腔外科学会等が発表したポジションペーパーでは「原則として抜歯時に骨吸収抑制薬を休薬しないことを提案する」との新たな見解が示された。いずれにしても、休薬の有無に関わらず抜歯を行う際には、引き続き注意深い観察が必要である。

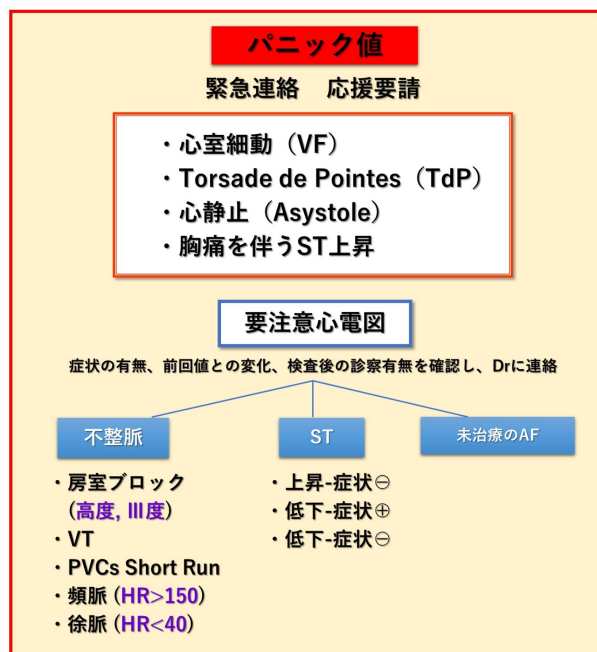
臨床検査・輸血部 「心電図記録解析の時点で緊急対応を可能とするチーム医療構築」

臨床検査・輸血部 笹木 理恵

日常の心電図検査から緊急対応を必要とする際、最初に遭遇するのは臨床検査技師です。10年前から当院では5名の認定心電図専門士を中心とした技師が心電図所見から医師に緊急連絡する体制を構築していますが、その有用性や問題点を明らかにするために、緊急連絡を必要とした症例について分析を行いました。2020年から当院で施行した心電図 (66979件) およびホルター心電図 (2030件) の記録解析時に、不整脈およびST-T変化の院内基準 (図1) から緊急連絡した全例 (160例) について、診断と対応、および転帰について分析。診断は頻脈性不整脈63例、徐脈性不整脈42例、虚血性心疾患20例、虚血以外のST-T変化35例でした。連絡後の対応としては、緊急入院29例、緊急冠動脈造影11例 (血行再建術10例)、ペースメーカー植込み23例等の有効な急性期治療に繋がっており、急性期の死亡例はみられませんでした。技師による的確な心電図診断と緊急連絡体制の構築は急性期治療において重要と考えられ、本研究は第88回日本循環器学会学術集会 (2024年3月) チーム医療セッションにて「心電図記録解析の時点で緊急対応を可能とするチーム医療構築の重要性」として発表する機会を頂きました。高いご評価と共に他施設の医師や検査技師から多くの貴重なご意見を頂くことができ、心電図院内基準や確実な緊急連絡の方法の改定について検討中です。

チーム医療の一員として貢献できるようスタッフ一同努力を続けてまいりますので、引き続きよろしくご厚意申し上げます。

図1 心電図解析時の院内緊急連絡基準



診療技術部門のお仕事紹介

栄養管理部のお仕事紹介します

栄養管理部栄養士長（管理栄養士） 山内 明美

栄養管理部は管理栄養士10名、調理師19名、調理補助6名、派遣5名、食器洗浄担当の委託業者10名、総勢50名の大所帯です。主な業務は入院患者への食事提供と栄養管理です。食事については患者から「美味しい」「選択食が選べるのが嬉しい」などのご意見をいただいております。日々の業務の励みになっています。栄養管理では入院患者が治療を完遂できるよう、栄養スクリーニング・アセスメントを行い栄養状態を把握し、栄養状態の維持や低栄養の改善に努めています。また治療のため食欲不振の患者に対しては直接話を伺い食事の調整を行ったり、アレルギー患者には事前に聞き取りを行い、入院した日から安心して食事を食べて頂けるようきめ細かな対応を行っています。



言語聴覚士 一耳鼻咽喉科のお仕事一 特定技術部門 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 言語聴覚士 椿本 真弓

言語聴覚士（ST）は、「話す」「聞く」「食べる」などに問題がある患者さんへ、リハビリテーションを行います。当院には、リハビリテーション部に5名、耳鼻咽喉科に2名在籍しています。耳鼻咽喉科のSTは、各種聴覚検査と、人工内耳の調整を行っています。人工内耳は人工臓器のひとつで、高度難聴者や補聴器では聞き取れない方に対する聴覚獲得法です。手術で耳に埋め込んだインプラントに送る音の調整をSTが行います。音を電気信号で伝えるため、最初はロボットや宇宙人が話しているみたいだと感じる方が多いですが、調整により自然な音声となり、会話の他にも足音などの環境音も聞こえるようになります。患者さんが円滑に社会生活を送れるよう、コミュニケーションのお手伝いをしています。

令和5年度 患者数等統計

（経営企画課）

区分	外来患者延数	一日平均外来患者数	院外処方箋発行率	初診患者数	紹介割合	入院患者延数	一日平均入院患者数	稼働率	前年度稼働率	平均在院日数(一般病床)
	人	人	%	人	%	人	人	%	%	日
1月	26,642	1,402.2	97.7	898	101.3	13,150	424.2	70.5	70.8	11.0
2月	26,274	1,382.8	97.5	915	100.2	13,712	472.8	78.5	79.8	10.4
3月	29,342	1,467.1	97.7	972	100.5	14,619	471.6	78.3	80.4	10.2
計	89,327	1,540.1	97.6	2,785	100.7	41,481	455.8	75.7	76.9	10.5
累計	273,354	1,124.9	97.5	12,439	98.8	170,162	464.9	77.2	76.1	10.2

時事ニュース

- ・入学式 4月 5日（金）
- ・看護の日 5月12日（日）
- ・看護週間 5月12日（日）～ 18日（土）
- ・医大祭 6月 7日（金）～ 9日（日）

編集後記

今年度から新たに広報誌編集委員に加わり、初めて委員会に参加するにあたり、貰った資料に目を通すと編集後記の担当者欄に自分の名前が入っているのを見て思わずフツてなりました。薬剤部の櫻庭です。

今回の病院ニュース、お楽しみいただけただでしょうか。聞くところによると道北・道東の医療機関にも広く配布されるそうで、旭川医大のいろいろを知っていただく良い機会なのと同時に、「迂闊に変なこと言えないな…」という緊張感も感じています。これからもこの広報誌を通じて旭川医大を「おもしろい病院」と思ってもらえるような内容をお届けできればと思いますのでみんなも読んでね。

実はこの編集後記、全体の記事の配置を決めている段階で執筆し始めています。内容は1ミリも知らないんですけど、今私は全てを知った顔してこの文章をしたためています。

薬剤部 櫻庭 好祐